

---

1. (a) 次の中から開集合を選択せよ。

$$A = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2 \mid 1 \leq |\mathbf{x}| < 2\} \quad (1)$$

$$B = \{\mathbf{x} = (x_1, x_2) \in \mathbb{R}^2 \mid x_1 > 0, x_2 > 0\} \quad (2)$$

$$C = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^3 \mid |\mathbf{x}| < 1\} \cup \{(1, 0, 0)\} \quad (3)$$

$$D = \bigcap_{k=1}^{\infty} D_k \quad \left( D_k = \left\{ \mathbf{x} \in \mathbb{R}^2 \mid |\mathbf{x}| < \frac{1}{k} \right\} \right) \quad (4)$$

$$E = \bigcup_{k=1}^{\infty} E_k \quad \left( E_k = \left\{ \mathbf{x} \in \mathbb{R}^2 \mid |\mathbf{x}| < 1 - \frac{1}{k} \right\} \right) \quad (5)$$

(b)  $D = \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid x > 0, y > 0\}$  とし、 $f : D \rightarrow \mathbb{R}$  を  $f(x, y) = x^y$  と定義する。 $(a, b) \in D$  について次の式を求めよ。

$$\frac{\partial f}{\partial x}(a, b), \quad \frac{\partial f}{\partial y}(a, b) \quad (6)$$

(c) 写像  $\mathbf{f}$  を次のように定める。

$$\mathbf{f} : \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}^3 \quad \mathbf{f}(x_1, x_2) = \begin{pmatrix} x_1^2 \\ -x_1^2 + x_2 \\ -4x_1 + x_2^2 \end{pmatrix} \quad (7)$$

また、 $\mathbf{n} = {}^t(1 \ 2 \ 1)$  とする。

この時、次の条件を満たす  $(a, b) \in \mathbb{R}^2$  を求めよ。

$$\frac{\partial \mathbf{f}}{\partial x_i}(a, b) \text{ と } \mathbf{n} \text{ は直交} \quad (i = 1, 2) \quad (8)$$

2.  $D_1, D_2 \subset \mathbb{R}^n$  を開集合とする。この時、 $D_1 \cap D_2$  と  $D_1 \cup D_2$  は  $\mathbb{R}^n$  の開集合となることを示せ。

3.  $D \subset \mathbb{R}^2$  を開集合とし、 $f : D \rightarrow \mathbb{R}$  を  $C^2$  級関数とする。この時、次の式を満たすことを示せ。

$$\frac{\partial^2 f}{\partial x \partial y} = \frac{\partial^2 f}{\partial y \partial x} \quad (9)$$

---

## 開集合

$\mathbb{R}^n$  の部分集合  $U$  が次を満たす時、開集合という。 $(d(x, y)$  は距離関数)

$$\forall x \in U, \exists \varepsilon > 0 \text{ s.t. } y \in \mathbb{R}^n, d(x, y) < \varepsilon \Rightarrow y \in U \quad (10)$$

## 開集合の公理

集合  $X$  の部分集合族  $\mathcal{O}$  が次の 3 つを満たす時、 $\mathcal{O}$  の要素を開集合という。

1.  $\phi \in \mathcal{O}, X \in \mathcal{O}$
2.  $U_i \in \mathcal{O} \ (i = 1, \dots, n) \Rightarrow \bigcap_{i=1}^n U_i \in \mathcal{O}$
3.  $U_\lambda \in \mathcal{O} \ (\lambda \in \Lambda) \Rightarrow \bigcup_{\lambda \in \Lambda} U_\lambda \in \mathcal{O}$

式 (10) により定義した開集合は開集合の公理を満たす。

.....

$$\frac{d}{dx} x^r = r x^{r-1} \quad (r \neq 0) \quad (11)$$

$$\frac{d}{dx} r^x = r^x \log r \quad (r > 0) \quad (12)$$

.....

## $f(x, y)$ の偏導関数の定義

$$f_x(x, y) = \frac{\partial}{\partial x} f(x, y) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h, y) - f(x, y)}{h} \quad (13)$$

$$f_y(x, y) = \frac{\partial}{\partial y} f(x, y) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x, y+h) - f(x, y)}{h} \quad (14)$$

.....

## 平均値の定理 (Lagrange)

関数  $f(x)$  を閉区間  $[a, b]$  で連続、开区間  $(a, b)$  で微分可能とする。

この時、次を満たす  $c \in (a, b)$  が存在する。

$$\frac{f(b) - f(a)}{b - a} = f'(c) \quad (15)$$

また、区間の幅を  $h = b - a$  とおき、 $c = a + \theta h$  ( $0 < \theta < 1$ ) とすると次の式を得る。

$$f(b) - f(a) = f'(a + \theta h)h \quad (16)$$

---

次の中から開集合を選択せよ。

$$A = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2 \mid 1 \leq |\mathbf{x}| < 2\} \quad (17)$$

$$B = \{\mathbf{x} = (x_1, x_2) \in \mathbb{R}^2 \mid x_1 > 0, x_2 > 0\} \quad (18)$$

$$C = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^3 \mid |\mathbf{x}| < 1\} \cup \{(1, 0, 0)\} \quad (19)$$

$$D = \bigcap_{k=1}^{\infty} D_k \quad \left( D_k = \left\{ \mathbf{x} \in \mathbb{R}^2 \mid |\mathbf{x}| < \frac{1}{k} \right\} \right) \quad (20)$$

$$E = \bigcup_{k=1}^{\infty} E_k \quad \left( E_k = \left\{ \mathbf{x} \in \mathbb{R}^2 \mid |\mathbf{x}| < 1 - \frac{1}{k} \right\} \right) \quad (21)$$

- $A$  について

$(1, 0) \in A$  であるが、 $\forall \varepsilon > 0$  とすると  $(1 - \varepsilon, 0) \notin A$  である。

$A$  は  $(1, 0)$  の  $\varepsilon$ -近傍を含まないので開集合ではない。

- $B$  について

$(x_1, x_2) \in B$  に対し、 $\varepsilon = \min\{x_1/2, x_2/2\}$  とする。 $(x_1, x_2)$  から距離  $\varepsilon$  の範囲にある全ての点は  $B$  に含まれる。

$B$  は任意の点  $(x_1, x_2)$  の  $\varepsilon$ -近傍を含むので開集合である。

- $C$  について

$(1, 0, 0) \in C$  であるが、 $\forall \varepsilon > 0$  とすると  $(1 + \varepsilon, 0, 0) \notin C$  である。

$C$  は  $(1, 0)$  の  $\varepsilon$ -近傍を含まないので開集合ではない。

- $D$  について

各  $D_k$  は開集合であり、 $D_1 \supset D_2 \supset D_3 \supset \dots$  である。

$(0, 0) \in D$  であるが、 $\varepsilon > 0$  とすると  $0 < 1/l < \varepsilon$  となる  $l \in \mathbb{N}$  が存在する。

つまり、 $(\varepsilon, 0) \notin D_l$  である。

$D$  は  $(0, 0)$  の近傍を含まないため  $D$  は開集合でない。

- $E$  について

各  $E_k$  は開集合であり、 $\phi = E_1 \subset E_2 \subset \dots \subset \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2 \mid |\mathbf{x}| < 1\}$  である。

$\mathbf{p} \in E$  に対して、 $\mathbf{p} \in E_l$  が存在する。 $\mathbf{p}$  の  $\varepsilon$ -近傍は  $E_l$  に含まれるから  $E$  にも含まれる。よって、 $E$  は開集合である。

以上より、開集合は  $B$  と  $E$  の 2 つである。

.....  
 $D = \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid x > 0, y > 0\}$  とし、 $f : D \rightarrow \mathbb{R}$  を  $f(x, y) = x^y$  と定義す

る。 $(a, b) \in D$  について次の式を求めよ。

$$\frac{\partial f}{\partial x}(a, b), \quad \frac{\partial f}{\partial y}(a, b) \quad (22)$$

$$\frac{\partial f}{\partial x}(x, y) = yx^{y-1}, \quad \frac{\partial f}{\partial y}(x, y) = x^y \log x \quad (23)$$

これにより求める式は次のようになる。

$$\frac{\partial f}{\partial x}(a, b) = ba^{b-1}, \quad \frac{\partial f}{\partial y}(a, b) = a^b \log a \quad (24)$$

.....  
写像  $\mathbf{f}$  を次のように定める。

$$\mathbf{f} : \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}^3 \quad \mathbf{f}(x_1, x_2) = \begin{pmatrix} x_1^2 \\ -x_1^2 + x_2 \\ -4x_1 + x_2^2 \end{pmatrix} \quad (25)$$

また、 $\mathbf{n} = {}^t(1 \ 2 \ 1)$  とする。

この時、次の条件を満たす  $(a, b) \in \mathbb{R}^2$  を求めよ。

$$\frac{\partial \mathbf{f}}{\partial x_i}(a, b) \text{ と } \mathbf{n} \text{ は直交} \quad (i = 1, 2) \quad (26)$$

$\mathbf{f}$  を  $x_1, x_2$  で偏微分する。

$$\frac{\partial \mathbf{f}}{\partial x_1}(a, b) = \begin{pmatrix} 2a \\ -2a \\ -4 \end{pmatrix}, \quad \frac{\partial \mathbf{f}}{\partial x_2}(a, b) = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 2b \end{pmatrix}, \quad (27)$$

この 2 つの式は  $\mathbf{n}$  と直行する為、それぞれの内積が 0 になる。

$$2a - 4a - 4 = 0, \quad 0 + 2 + 2b = 0 \quad (28)$$

この結果、 $(a, b) = (-2, -1)$  である。

.....  
 $D_1, D_2 \subset \mathbb{R}^n$  を開集合とする。この時、 $D_1 \cap D_2$  と  $D_1 \cup D_2$  は  $\mathbb{R}^n$  の開集合となることを示せ。

$\forall \mathbf{p} \in D_1 \cap D_2$  とする。

開集合の定義はある実数  $\varepsilon > 0$  が存在し、点  $\mathbf{p}$  からの距離が  $\varepsilon$  に満たない範囲の全ての点が  $\mathbf{p}$  と同じ集合に含まれていることである。

$p \in D_1 \cap D_2$  より  $p \in D_1$  かつ  $p \in D_2$  である。

$p \in D_1$  である為、 $\varepsilon_1 > 0$  が存在し開集合の定義を満たす。同様に  $p \in D_2$  から  $\varepsilon_2 > 0$  が存在する。そこで  $\varepsilon = \min\{\varepsilon_1, \varepsilon_2\}$  とすると、 $D_1, D_2$  の両方の開集合の定義を満たす。

この  $\varepsilon$ -近傍内の点は  $D_1 \cap D_2$  に含まれる為、 $D_1 \cap D_2$  が開集合であることが分かる。

$p \in D_1 \cup D_2$  とする。もし、 $p \in D_1$  であれば、 $p$  の  $\varepsilon$ -近傍は  $D_1$  に含まれる為、 $D_1 \cup D_2$  にも含まれる。 $D_2$  も同様に考えることで  $D_1 \cup D_2$  が開集合であることが分かる。

.....

$D \subset \mathbb{R}^2$  を開集合とし、 $f : D \rightarrow \mathbb{R}$  を  $C^2$  級関数とする。この時、次の式を満たすことを示せ。

$$\frac{\partial^2 f}{\partial x \partial y} = \frac{\partial^2 f}{\partial y \partial x} \quad (29)$$

導関数の定義に従い式を書き換える。

$$\frac{\partial^2 f}{\partial x \partial y}(x, y) \quad (30)$$

$$= \frac{\partial}{\partial x} \left( \frac{\partial f}{\partial y}(x, y) \right) \quad (31)$$

$$= \frac{\partial}{\partial x} \left( \lim_{h_y \rightarrow 0} \frac{f(x, y + h_y) - f(x, y)}{h_y} \right) \quad (32)$$

$$= \lim_{h_x \rightarrow 0} \frac{1}{h_x} \left( \lim_{h_y \rightarrow 0} \frac{f(x + h_x, y + h_y) - f(x + h_x, y)}{h_y} - \lim_{h_y \rightarrow 0} \frac{f(x, y + h_y) - f(x, y)}{h_y} \right) \quad (33)$$

$$= \lim_{h_x \rightarrow 0} \lim_{h_y \rightarrow 0} \frac{1}{h_x h_y} (f(x + h_x, y + h_y) - f(x + h_x, y) - f(x, y + h_y) + f(x, y)) \quad (34)$$

$$= \lim_{h_x \rightarrow 0} \lim_{h_y \rightarrow 0} \frac{\Delta}{h_x h_y} \quad (35)$$

ただし、 $\Delta$  は次のように置く。

$$\Delta = f(x + h_x, y + h_y) - f(x + h_x, y) - f(x, y + h_y) + f(x, y) \quad (36)$$

同様にして次も得られる。

$$\frac{\partial^2 f}{\partial y \partial x}(x, y) = \lim_{h_y \rightarrow 0} \lim_{h_x \rightarrow 0} \frac{\Delta}{h_x h_y} \quad (37)$$

ここで、

$$g_1(X) = f(X, y + h_y) - f(X, y) \quad (38)$$

とおくと、

$$\Delta = g_1(x + h_x) - g_1(x) \quad (39)$$

$$= g'_1(x + \theta_1 h_x) h_x \quad (0 < \theta_1 < 1) \cdots \text{平均値の定理} \quad (40)$$

である。

$$g'_1(X) = \frac{d}{dX} g_1(X) = \frac{\partial}{\partial X} f(X, y + h_y) - \frac{\partial}{\partial X} f(X, y) = f_x(X, y + h_y) - f_x(X, y) \quad (41)$$

より

$$\Delta = (f_x(x + \theta_1 h_x, y + h_y) - f_x(x + \theta_1 h_x, y))h_x \quad (42)$$

である。

$$g_2(Y) = f_x(x + \theta_1 h_x, Y) \quad (43)$$

とおくと

$$\Delta = (g_2(y + h_y) - g_2(y))h_x \quad (44)$$

$$= (g_2'(y + \theta_2 h_y)h_y)h_x \quad (0 < \theta_2 < 1) \cdots \text{平均値の定理} \quad (45)$$

$$g_2'(Y) = \frac{d}{dY}g_2(Y) = \frac{\partial}{\partial Y}f_x(x + \theta_1 h_x, Y) = f_{xy}(x + \theta_1 h_x, Y) \quad (46)$$

より  $\Delta$  は次のように表せる。

$$\Delta = f_{xy}(x + \theta_1 h_x, y + \theta_2 h_y)h_x h_y \quad (0 < \theta_i < 1, i = 1, 2) \quad (47)$$

この式は  $\Delta$  の式 (36) を  $x$  について式を変形した後、 $y$  について変形を行っている。

逆に式 (36) を  $y$  について式を変形した後、 $x$  について変形を行うと次の式が得られる。

$$\Delta = f_{yx}(x + \theta_3 h_x, y + \theta_4 h_y)h_x h_y \quad (0 < \theta_i < 1, i = 3, 4) \quad (48)$$

式 (47) と式 (48) を使うと次の 2 つの式が得られる。

$$\lim_{(h_x, h_y) \rightarrow (0,0)} \frac{\Delta}{h_x h_y} = \lim_{(h_x, h_y) \rightarrow (0,0)} f_{xy}(x + \theta_1 h_x, y + \theta_2 h_y) = f_{xy}(x, y) \quad (49)$$

$$\lim_{(h_x, h_y) \rightarrow (0,0)} \frac{\Delta}{h_x h_y} = \lim_{(h_x, h_y) \rightarrow (0,0)} f_{yx}(x + \theta_3 h_x, y + \theta_4 h_y) = f_{yx}(x, y) \quad (50)$$

左辺が等しい為、 $f_{xy}(x, y) = f_{yx}(x, y)$  であることが示せる。